

オオカワヂシャとカワヂシャの間の雑種

田 中 俊 雄*

Toshio Tanaka: A new natural hybrid between *Veronica anagallis-aquatica* L.
and *V. undulata* Wallich

オオカワヂシャ (*Veronica anagallis-aquatica* L.) とカワヂシャ (*V. undulata* Wallich) の分布調査を行っている際、両種が混生している京都府、大阪府そして兵庫県の都市部近郊の河川の水際で、両種によく似ているが、多数の花をつけた何本もの花序がひょろひょろと細長く伸び上がり、そのために不安定な形をしている植物を発見した。

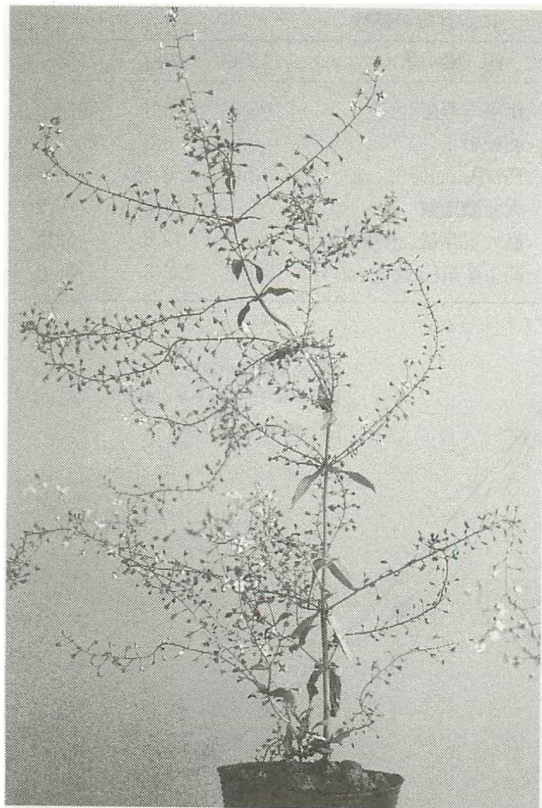


図1 カワヂシャ節の雑種 (1994. Oct. 4). 兵庫県小野市加古川で採集。

一つの花序内に含まれる花の数は、オオカワヂシャやカワヂシャよりも多く、十分に生長した個体では、150以上になるものもあった。花冠幅、花冠色、雄蕊長、雌蕊長などの外部形態は、両種の中間的な形態を示していた。

この植物の染色体を観察した結果、体細胞の染色体数は $2n=45$ であった。オオカワヂシャとカワヂシャの染色体数は、それぞれ $2n=36$ と $2n=54$ である (田中・野口, 1994)。これらのことから、中間的な外部形態を持つ植物は、オオカワヂシャとカワヂシャの間の雑種と推定される。

Veronica Sect. *Beccabunga* (クワガタソウ属カワヂシャ節) 内の種間雑種に関しては、*Veronica anagallis-aquatica* L. $\times$ *V. catenata* Pennell について、Brooks (1976) や Heckard & Rubtsoff (1977) などが報告している。日本に生育する植物で、カワヂシャ節内の種間雑種については、本報告が最初のものであると思われる。

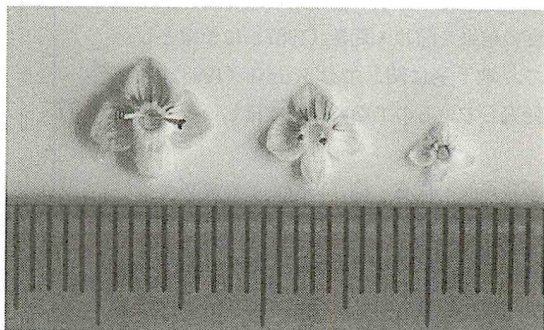


図2 花冠の大きさの比較 (左: オオカワヂシャ, 中央: 雑種, 右: カワヂシャ). 定規の1目盛りは1mm.

*兵庫県立武庫荘高等学校 (現在, 兵庫教育大学大学院自然系コース)

花粉母細胞の減数分裂は異常であり、形成された花粉の稔性率は、ゲンチアナ紫染色による観察で、約5%と極めて低かった。オオカワヂシャやカワヂシャの花粉の稔性率は、いずれも90%以上であった。

生育の初期の段階の雑種は、推定される両親の形態とよく似ているので識別が困難であるが、成熟個体では、花後の子房がほとんど膨らまず、しばんだ萼片を多数つけた、ひょろひょろとした細長い花序の姿で、オオカワヂシャやカワヂシャから容易に区別できる。大部分の蒴果の中に種子は形成されていないが、1個または2個できていることもある。

F₁がわずかに形成する種子を播種して生育させたF₂の外部形態、染色体数そして花粉の稔性率などが、どのように変化していくかについて、現在、調査を行っている。

るところである。また今後、酵素多型分析なども試みるにより、雑種とオオカワヂシャやカワヂシャとの関係を、より詳細に理解していこうと考えている。

引用文献

- Brooks, R. E., 1976. A new *Veronica* (Scrophulariaceae) hybrid from Nebraska. *Rhodora* 78: 773—775.
- Heckard, L. & P. Rubtzoff, 1977. Additional notes on *Veronica anagallis-aquatica* × *catenata* (Scrophulariaceae). *Rhodora* 79: 579—582.
- 田中俊雄・野口順子, 1994. 京阪神地域で生育するオオカワヂシャとカワヂシャについての研究. 水草研究会報 No.52: 5—15.

○『長良川下流域生物相調査報告書』(長良川下流域生物相調査団発行, 1994年7月, 161p)

河口堰建設で揺れる長良川下流域の生物相を1990年から1994年にかけて調査した記録である。行政の行なうアセスメントではなく、岐阜県の生物研究者94名が自主的に調査団を結成し、生物相の現状と堰の建設が長良川の自然に与える影響を考えようとしたものである。植物のほか、哺乳類、鳥類、魚類、底生動物、動物プランクトンが調査対象となっている。植物では、21カ所の調査地点について河辺に生育していた種のリストと植生断面模式図がある。調査地点が明示されているところが重要で、将来、同じ場所での追跡調査が可能になっている、植物目録には168種が挙げられている。

○『黒部川と水生生物』『同〈資料編〉』(富山県河川生態研究会, 1994年3月, 43p+90p)

日本アルプスに水源を発し日本海に注ぐ黒部川は、日本でも有数の急流河川である。その本流と支流の生物相の調査記録である。急流である上、水温の低い川なので生物の種類数は多くないが、逆に水のきれいな河川には、どのような生物が見られるのかという基礎資料になる。

水草ではやはりバイカモ、ミクリ類、エビモといった湧水地帯に多い種の多産が目立つ。資料編の植物目録には水際の植物も含め44種(水中のコケ植物含む)が挙げられ、また26調査地点の調査票がそのまま収められている。

○『富山市呉羽丘陵自然環境調査報告』(富山市科学文化センター編集・発行, 1994年3月, 253p)

富山市街にほど近い呉羽丘陵は、以前、開発に反対する署名を依頼されたことがあって、名前だけはよく知っていた。この報告書をみると、せまい地域だがかなり良好な自然が残された場所であることがわかる。動物、植物さまざまなグループの調査が行われ、目録にまとめられている。この目録に採集日時等のデータを付して標本を引用していることは、たいへん良いことだと思う。

植物は富山県に産する約2,500種のうち4割弱に及ぶ927種がこの地域だけで確認できるという。水田や河川も調査範囲に入っているので水草や湿地の植物もいろいろと挙げられている。

(角 野 康 郎)